

第一日曜日
教会学校 9:00～
主日第一礼拝 9:00～
主日第二礼拝 10:30～

その他の日曜日
教会学校 9:00～
聖書を読む会 9:00～
主日礼拝 10:30～

日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2018 (平成30年) 2. 11

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

聖書と祈り会
毎週水曜日 10:30～
成人会
第3日曜日 礼拝後
婦人会
第4日曜日 礼拝後
教会附属 南部坂幼稚園

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

「パウロが聞いた「福音」」

(テサロニケの信徒への手紙一 [六])

牧師 松谷 祐二

テサロニケの信徒への手紙一 第三章六～一三節

ところで、テモテがそちらからわたしたちのもとに今帰って来て、あなたがたの信仰と愛について、うれしい知らせを伝えてくれました。また、あなたがたがいつも好意をもってわたしたちを覚えていてくれること、更に、わたしたちがあなたがたにぜひ会いたい望んでいるように、あなたがたもわたしたちにしきりに会いたがっていることを知らせてくれました。それで、兄弟たち、わたしたちは、あらゆる困難と苦難に直面しながらも、あなたがたの信仰によって励まされました。あなたがたが主にしっかりと結ばれているなら、今、わたしたちは生きていけると言えるからです。わたしたちは、神の御前で、あなたがたのことで喜びにあふれています。この大きな喜びに対して、どのような感謝を神にささげたらよいでしょうか。顔を合わせて、あなたがたの信仰に必要なものを補いたい、夜も昼も切に祈っています。

どうか、わたしたちの父である神御自身とわたしたちの主イエスが、わたしたちにそちらへ行く道を開いてくださいますように。どうか、主があなたがたを、お互いの愛とすべての人への愛とで、豊かに満ちあふれさせてくださいますように、わたしたちがあなたがたを愛しているように。そして、わたしたちの主イエスが、御自身に属するすべての聖なる者たちと共に来られるとき、あなたがたの心を強め、わたしたちの父である神の御前で、聖なる、非のうちどころのない者としてくださるよう、アーメン。

(新共同訳聖書)

(おそらくは差別、迫害といった) 苦難に遭っているテサロニケ教会の信徒たち(兄弟たち)のことを、パウロはアテネから深刻に案じていました。彼らの信仰が動揺させられ、信仰を棄てる

者が出てしまわないように、自分が行って励ましたいと思いつながら、どうしても事情が許さず、パウロが自分で行くことはできません。そこで、同労のテモテを代わりに派遣して、信徒たちの信仰の様子を知ろうとしたのでした。

結果として、彼の心配はまったくの杞憂でした。テモテが帰って来て、その様子を聞いたパウロは「励まされ」、「喜びにあふれ」ました。「この大きな喜びに対して、どのような感謝を神にささげたらよいでしょうか」、「どんなに感謝してもしきれない、というほどに、パウロは喜んだのです。」

テモテが持ち帰った話を、パウロは「あなたがたの信仰と愛について、うれしい知らせを伝えてくれました」と書きました。「うれしい知らせを」と訳されているところは、原文では「福音を伝えてくれた」とも訳せる言葉です。パウロは福音を聞いたのです。普通、新約聖書で「福音」と言えば、「神がわたしたちを救ってくださった」という良い知らせのこと、特に、「イエス・キリストの十字架と復活のゆえに、神の救いは本当に確かなものとして、信じるすべての人に与えられる」というメッセージのことを指します。パウロが、初めにテサロニケに行つて人々に語り告げたのも、この「福音」でした。

しかし今度は、パウロ自身が「福音」を聞きまします。イエス・キリストの十字架と復活による救いという基本的な「福音」を聞いたのではありません。その「福音」を、苦難に遭つても堅く信じて動揺しない、テサロニケの兄弟たちの信仰について聞きました。イエス・キリストを通して示された神の愛が、浸透して兄弟たちの間の愛となり、またパウロやテモテらのことをも思う愛ともなっていることを聞きました。パウロが最初に伝えた福音、イエス・キリストによる救いを告げる神の言葉が、テサロニケ教会で実際に信徒たちの中に生きて働いていること、彼らの信仰と愛とに結実していることを、パウロは聞くことができたのです。伝道者パウロにとって、これはまさに福音でした。彼はまた、「わたしたちは…あなたがたの信仰によって励まされました。あなたがたが主にしつ

かりと結ばれているなら、今、わたしたちは生きていけると言えるからです」とも言っています。テサロニケの兄弟たちが主イエス・キリストにあって堅く立つてこそ、わたしたちは生きていけると言える。それこそがわたしたちの生き甲斐だ、ということでしょう。

イエス・キリストの十字架と復活は、福音の核心です。しかし、そのことがもし単に知識としてわたしたちの頭に収まっているだけで、それによってわたしたち自身の生きる姿勢が少しも変わっていないとしたら、それが「福音」なのだ、どうして他の人々に分かるでしょうか。逆に、わたしたちの信じる、イエス・キリストの十字架と復活による救いが、わたしたち自身の堅固な信仰となつて、また信仰者同士の、そして他のすべての人々への広く豊かな愛となつて結実するならば、それを見聞きする他の人々は、イエス・キリストのことを、本当に「福音」として聞けるのです。

キリスト者同士も、遠くにおいて、しばらく顔を合わせずにいる仲間が、主にしっかりと結ばれていることを、その信仰と愛とを伝える聞くことができるとき、大いに励まされ、喜びにあふれるのです。そうであつてこそ、キリストにある諸教会全体が本当に「生きてい」と言えるのです。

イエス・キリストによる救いを知らせる「福音」の言葉が、そのように「福音」にあさわしい信仰と愛とに結実するまでの道のりは平坦ではありません。わたしたちの信仰と愛における成長は、もどかしいほどゆっくりとしたものですし、「もうこれで十分」ということもありません。

だからこそ、キリスト者の間では、パウロがそうしたいと切望しているように、互いに顔を合わせて、信仰に必要なものを補うということが必要です。パウロが神と主イエスとにささげたような、教会全体の信仰と愛における成長、終末の完成に至る導きを求める祈りが不可欠です。わたしたちが主日の礼拝に集まるのは、いえ、主イエスがわたしたちを集められるのは、一人一人が神を仰ぐためであるのはもちろんですが、この補い合いと祈りのためでもあるのではないのでしょうか。

東神大・夜間公開講座の思い出

六 戸 信次郎

教会週報に東京神学大学公開夜間神学講座(七十二期生)の募集の記事を読んで、急に昔のことを懐かしく思い出しました。

私が東神大の夜間公開講座に入学したのは二〇〇五年(五十九期生)のことです。考えてみると、十三年も前のことになりました。

東京神学大学公開夜間神学講座は、銀座教会の地下の礼拝所で、月曜日と金曜日の午後六時から八時までの二時間、二年間にわたって行われます。夏には一泊どまりの合宿もあり、ちょっとした学生気分も味わいました。当時は毎年、十五人近くの応募があり、二学年が同時に学ぶので、教室がかなり手狭になっていました。参加者は、会社勤めを卒業した元サラリーマンや、CSの先生方が多かったように思います。長い間、この講座に参加するのが夢だったのが、会社勤めが終わって、ようやく参加できて本当に嬉しい、と語られた方も複数おられました。特筆すべきは、毎年、講座修了者の中から召命を受けて東京神学大学に進まれる方が複数生み出されることです。

先日、当教会の特伝で説教してくださいました、浅草北部教会の大橋牧師は、公開講座の同級生でした。授業は時間としては二時間ですが、途中の休憩をはさんで、聖書を読んでもお祈りをする、短い礼拝が用意され、参加者全員が持ち回りで担当します。そのため、授業は、ちよつど百分授業、大学時代に逆戻りした感じです。

先生方は、東京神学大学の当時の第一線の教授陣です。近藤先生、山口先生、神代先生、芳賀先生、中野先生、関川先生、棚村先生、本間先生、三永先生、ジャンセン先生、そのほかにも沢山の先生方が三鷹の大学から、銀座教会に駆けつけてくださいました。

ました。本当に有難かったです。

私が夜間公開講座に行こうと思ったのは、教会学校で教師を始めたことが大きいですが、当時、鳴海先生と中・高科を担当し始めたのですが、子供達に何を語ったら良いのか、ひよつとして間違つたメッセージを伝えてはいないだろうか?不安がいつもありました。そこで、公開講座で学ぼうと思ひ立ったのでした。

さて、授業の中身ですが、これが実に面白いのです。神学を舐めているわけではないのですが、受講する前に考えていた以上に、教わることが沢山あって、何しろ楽しいのです。私は若いころから学校が嫌いで、授業ではさぼることが日常だったので、授業ではじめて、授業が楽しいと感じました。二年後の卒業時に、皆勤賞を頂けたのも、何より、楽しかったからだと思ひます。

山口先生の授業はちよつと難しく、資料も毎回、沢山配られます。読むだけでも一苦労なので、生徒の一人が恐る恐る、「先生の授業は少し難しくして」と言つたところ、山口先生は「それは私が悪かつた、大変、申し訳ない」と仰つたのですが、次の週にはもつとたくさん資料が出てきて、生徒一同、何も言えなくなつた、というエピソードも楽しい思い出です。

沢山の教会の仲間が出来たのも、私の財産になりました。違つた教会で育つた者同士です。いろんなお祈りの仕方があるのだな、と気づかされたのもこの時です。

公開夜間講座では、毎日、沢山のメモを取りました。今の私に、何が残っているかはなほだ疑わしいのですが、不思議なことに、教会学校での説教を準備するとき、毎週、毎週悩むことは相変わらずなのですが、不安感は少なくなつたと感じます。イエスキリストを宣べ伝えればいいのだ、とどこかで吹っ切れたのかな、と思つています。皆さん、一度、夜間公開講座に参加されることをお勧めします。楽しいですよ。

報 告

*東京神学大学後援会(西南地区)の集会、神代真砂実先生の講演会が、一月二十八日(日)午後二時~四時、聖徒教会(恵比寿)で行われました。

*東京神学大学 公開夜間神学講座二〇一八年度受講生(第七十二期生)募集の案内が来ております。パンフレットをご覧になり、受講をお考えの方は、牧師までご相談ください。

*各献金(熊本・大分地震被災教会支援献金、東京神学大学後援会献金、隠退教師を支える運動、神学生を支える献金、オルガン献金、会堂建築献金)へのご協力も、引き続きよろしく願ひします。

《各部報告 一月度》

成人会

日 時 一月二十一日

主日礼拝後、一時~二時半

場 所 教会会議室

出席者 十名

開会祈祷 松谷祐二牧師

内 容

エレミヤ書四十六章から四十九章を牧師による朗読、各章毎に牧師解説。

イスラエル周辺諸国が神の裁きから免れないこと、余り語られない周辺諸国のイスラエル、バビロンとの関わり、地理的關係について学んだ。

次回は二月十八日、五十~最終五十二章。担当、松谷祐二牧師。来年度の成人会進め方についても協議予定。黙祷を持って閉会。

婦人会

日 時 一月二十八日 主日礼拝後

場 所 教会堂会議室

出席者 八名

開会祈祷 黙祷

閉会祈祷 各自小祈禱

内 容

一、聖書研究「ヨシユア記」二、三、四章 二章 主はイスラエルの民を約束の地に導くモーセの役割をヨシユアに託した。ヨシユアはヨルダン川を渡るにあたり、対岸の都市国家エリコを偵察するため、二人の斥候を派遣する。二人はラハブの娼館に宿をとる。このことを王に密告するものがあつたが、ラハブの機転で二人は任務を果たす。彼女は、イスラエルの民が主の守護によってエジプトを脱出し、ヨルダン川の向こうの戦鬪とその結果を知っており、自分が示した誠意に対してイスラエルが彼女の一族の生命を守ることを神の前で約束するよう迫る。二人は主がイスラエルに約束を果たされるとき、彼女に誠意と真実を示そうと約束し、そのための条件を指示する。

三章 ヨルダン川を渡る手順と過程が、出エジプトの再現のように記述されている。

四章 ヨルダン川渡河後、イスラエルの十二部族を象徴する石碑の設置が、エジプト脱出時の「過越し」の伝承のように子々孫々に語り継がれるヨルダン川渡河が記憶されイスラエルの神を一層崇敬するように、行われた。

次回 「ヨシユア記」五、六章を学ぶ。

二、二月愛餐会の打合せを行った。

三、二月婦人会は第四主日が修養会のため、第二主日の礼拝後に開催する。

